
地を駆ける焔のように

STORM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地を駆ける焔のように

【Nコード】

N8602F

【作者名】

STORM

【あらすじ】

先駆者よりも後の時代、また新たな物語が作られようとしていた。失くした少年を思い続ける少女、思い出したいくない過去を背負う少女、一度自分を亡くした少年。この三人が作り出す戦いと恋の物語。

0 - 追憶と出会い (前書き)

結構普通に意味わからんタイトルです。

まあ、読んでいけば理解していただけの方もいらっしゃるんじゃないと思います。

0 - 追憶と出会い

高校二年の冬、彼は私の学校にやってきた。

「なに、文句でもあるの？」

「う、うめんさい！」

「ったく、^{かける}駆のくせに私に刃向うのが悪いのよー！」

中学の頃、私は生徒会長をしていた。

生徒会役員でもなかったの一生徒をとことん利用して。

でも、私はその生徒と一緒にいて楽しかったし、悪い思い出もない。

「でもパソコンできないんじゃないけど……。」

「う、うるさい！黙って聞いてれば私の文句しか言っていないじゃない。殴るわよ？」

「も、もう言わないから殴らないでー！」

私の前ではおびえきつて、私に刃向わなくなる。
男の子とは思えないほど貧弱な性格をしていた。
中1の頃の春に私に殴られたのがよっぼど怖かったらしい。
そんな彼でも、私の中では最も信頼している人となっていた。
確かに貧弱かもしれない。

自分の言うことは何でも聞いてくれるし・・・先生から変な疑惑を
かけられたときも身を呈して私をかばってくれたこともある。
とってもいい奴なんだ。

そんな彼を、私は愛していたのかもしれない。
そう気づいたのは中3の時の秋。

彼とは進路が違うということを知った時だった。

「え、駆・・・何で？」

「会長。これだけは絶対に譲れません」

「何で・・・あなた、私のそばにいてくれるって言ったよね？」

「本当にすいません」

この時私は物凄い寂しさを覚えた。

一緒にいることが当たり前前、そう考えていたのに・・・。

これからも一緒にいてほしかったのに。

でも、そう思えば思うほど、思いがはち切れそうになって・・・ま
ともに話すこともままならなくなった。

そのまま、卒業まで何もできなかった。

いや、何もできないどころか、それ以上に時間を無駄にしていたよ
うにしか思えない。

このとき私はとても弱い存在なんだと気付いた。
自分は彼がいないと何もできない。
そう気づいていたのに、気づいていないふりをし続けていた。

卒業式の日、彼は私に一言だけ声をかけた。

「会長、今まで楽しかったですよ」

……と。

最後までいい……名前でも呼んでくれてもいいのに。
強くそう思った。

心から、涙があふれ出た。

その感覚は今でも覚えている。

でも、何もできなかった。

思いを告げるところか、そこから声をかけることも。

今では彼の甲高い声も懐かしい。

声変わりもしてなかったし。

本当に、女の子みたいなきな子だった。

顔は母親になのか、非常に美しく見えたし、悪い顔ではない。

結構中性的で、初めて見た時は横顔が女の子に見えてビックリした
のを覚えている。

どれ程経つても彼への思いを忘れることができない。

そして、最近私は彼の夢ばかり見ている。

彼はイギリスに留学した。

恐らくもう二度度会うことはないと思う。

そう思つて私は毎晩涙を流している。

2年近くもズルズルと引きずっている自分が情けなく思える。

人間はやつて後悔するよりやらないで後悔する方が強く後悔するらしい。

私は強くそう思った。

「最後までいい告つておけばよかったな……。」

でも緊張しすぎて死んでたかもしれないし……。

そもそもあいつに告ること自体、私のプライドが許さなかったのかも知れない。

私の手足のように使っていた男に……今更喜欢いですなんて言える訳がない。

毎日が切ない。

「無理やり唇奪つとけばよかったかな……。」

毎晩こんなことを考えてる。

私がいくら仕草で訴えても一番好きになつてほしい人には好きになつてもらえない。

好きだと気付いてくれない。

後悔が私を襲い、それが涙として形になつて表れる。

そんな苦しい日々を既に2年近くも過ごしている。

私はいつも、苦勞して眠りに着く。

でも、その日はいつも以上に寝付けなかった。

「赤坂・・・駆・・・かあ」

彼の名前を呟いたら、少しずつ、睡魔が襲ってきた。

翌日のこと、私は教室の片隅、私の席から窓の外を眺めていた。雪が降る季節になったんだな・・・と思いつつながら。朝の挨拶もスルーして、ずっと外を眺めていた。そんなときだった。

「突然だが、転入生を紹介する。入れ」

入ってきた男子。

彼を見た瞬間、私は自分の目を疑った。

入ってきた彼は・・・

紛れもなく、每晚私が思い続けている、あの人だったのだから。

顔は男らしく、凛々しくなっていた。

でも、あの顔は間違いなく駆だ。

中学の時、毎日のように見ていた彼の顔を、私が見間違っはずがない。

赤坂駆、逢いたかった・・・。

今度こそ後悔のないようにしよう。

そう誓った。

だけど、彼は最初の一言でこう言った。

「片瀬焰かたせほむら・・・よろしく」

・・・と。

0 - 追憶と出会い（後書き）

次回からは視点がコロコロ変わります。
あらすじに書かれた三人ですね。

1 - 宿命と思い

「か・・・ける・・・じゃない・・・。」
声は違う。

でも、声変りしただけかもしれない。

背は彼よりも大きい。

でも、背が伸びただけかもしれない。

目の色も違う。

でも、カラコンつけてるだけかもしれない。

髪の色も違う。

でも、染めてるだけかもしれない。

とにかく、嫌な予感を全て否定し続けた。

「焰！来てくれたんだね！」

女生徒の一人が転入生に飛び付く。

「バカ、何やってんだよ！」

そう言いながらも彼はその生徒に優しく、若干困ったような顔をしてそつと肩に手を回した。

「・・・あの女・・・殺す」

軽く殺意を覚えた。

それにしても、誰も駆のこと覚えてないのかしら。

って、そう言えばこの学校、同じ学校出身の人がいなかったっけ。

この時に反応しないのも当たり前か。

放課後

オレは今、屋上にいる。

今日の朝、ホームルームで抱きついてきた女・優衣ゆいと。

「元気してた？」

「ま、おかげさまでな。でもこの町にはあまりいい思い出はない。ただ一つ除いてはな」

「まあいいじゃん。これから何にもないなら社長から出された依頼をさっさとやろうよ。持ってきてるでしょ、得物は」

オレは手にしている袋に包まれた棒状のものを見せる。

「そっか、じゃあ今から行こうか」

雪降る中、一般人には不可解な話を進め、オレたちは一緒に学校を出た。

その時、ひとつの視線を感じたが大したものではなかったのです。一でしたが。

焰と一緒に並んで歩いてるんだから傍から見ればデートだよ、これ。

クリスマスにはまだ早いけど今月だしね。なんかそんな気分になっちゃう。

どうしよっかな、どうせ家帰っても一人だし・・・仕事終わったら焰呼んで・・・しよっかな・・・。

焰も普段はあんな感じだけど、する時は結構激しいし。

「ねえ、焰」

「何？」

「今日家に泊まってっつてよ？」

「別にいいけど？」

「うん、じゃあ早く終わらせようー！」

オレたちの仕事は暗殺、もしくは戦場での虐殺。国際的に雇われる、世界で唯一の殺人許可集団。優衣と出会ったのもそこでだ。

彼女はずっと孤児院で育っていた。

オレが親父にその組織の日本支部に連れて行かれた時に、孤児院から脱走した優衣と出会った。

オレはその後に団体に入る予定だったので、オレを無駄に気に入った優衣も我儘言っが入った。

才能のある人間なら2カ月程度で戦力にはなる。

優衣は才能があつたらしく、本当に2カ月で配属になった。

オレは半年を要したが、今では優衣に張り合う程の戦力にはなっている。

「いた、あいつだね！」

「神坂市長夫人、神坂喜代。薬物の取引をしているとの情報。警察も賄賂で動けない。なんて使えない警察なんだ」

「どーする？街中じゃばれるでしょ？」

「確かにな・・・どうやって殺そうか・・・。」

あれなら・・・そうだ。

「優衣、オレに任せてくれないか？」

「いいよ。焔がどのくらい強くなったのかもみたいしねっ！」

よし、そうと決まれば。

オレは布で覆っていた刀を抜きだす。

妖刀・オニミカド。

漢字では鬼帝。

中には鬼の力が封じ込められているとか。

マジで胡散臭え噂だ。

だが、この刀の力は本物だ。

なんたつていくら斬ってもはこぼれひとつしない上、血を浴びても切れ味も落ちない。

時々この刀から声が聞こえてくるが、女性の声だから明らかに鬼とは違う。

それから鞘にも工夫がある。

鞘についているトリガーを引けば抜刀時の威力が数倍に跳ね上がる。

この原理はどこかの退魔師が使ってたような気がするが、まあ気にしないことにしよう。

母上の居合と親父の剣術の両立を図ったためにオレの成長は遅いが、この妖刀との相性は抜群。

オレはかなり気に入っている。

つと、それはさておいて・・・行きますか！

「奥義・速戦即決！！」

知っている人もいるだろうが、この奥義は物凄い速さで攻撃する奥義である。

オレは目にも止まらぬ速さで市長夫人をさらい、裏路地に持って行った。

ちなみにこの奥義は親父も使えるが、オレはそこまで力は持っていないので発動時間は3秒が限界。

「さあ、薬の密売の懺悔でも聞こうか」

オレは市長夫人の首に刀を押しつけて言った。

だが、夫人は恐怖で喋ることすらできないらしい。

「しかたねえ。優衣、斬っていいか？」

「焰の仕事だよ。好きにしていよいよ。」

その言葉を聞いた瞬間、夫人の首が飛んだ。

そしてオレはすかさずバックステップ。

血液がオレに触れないようにするためだ。

後始末は優衣の魔術で終わる。

優衣の魔法属性は・・・禁術。

禁術・原子操作。

彼女の力は原子レベルに分解したり、原子をかき集めて新たな物質を構成したりする。

非常に強力な能力にもかかわらず、自らに影響は少ない。

それでも欠点はある、人間・動物・植物に対して発動しても効果はない。

ただし、原子を集めれば新たな生物を作るとは可能だ。

そして、それによって作り出された生物だけは結合を解除することが可能である。

血液も死体も跡形もなく消滅し、原子に還った。

オレと優衣が組むときはいつもこんなやり方だ。

オレが殺して、優衣が死体処理。

女の子にはこんなことやらせたくないんだけどな。

焰と一緒に帰っている時。

「早く帰ろっか」

「ああ、そうだな。腹も減ったし・・・今日の夕食、楽しみにしているよ」

「じゃあ、じゃあ、その後に・・・しよ？」

「ああ、わかった」

そのさりげない会話が、ある人物に聞かれたことにより今後焰に変に影響することにまだ私たちは気付きもしなかった。

「なんかフラグたつたよな？」

「え、そう？」

ちなみに帰ってからちゃんとしたよ。

焰と・・・二人で・・・

ゲームをね

2 - 衝撃と悲しみ

朝のことである。

オレが離れてくれない優衣を片手に学校に向かっていると、視線を感じた。

その視線からは悲しみと、憎しみなど、さまざまな感情が込められているように思えた。

視線の主を見ると・・・。

「!?...か、いちよう?」

いや・・・何でもない、オレには関係がないことだ。

「ねえ、焰。今日ずっと警戒してない?」

「ん・・・そうか?」

明らかにしてる。

だって私の話もあんまり聞いてくれないし。

周りをかなり気にしている。

「優衣、ちよつと先に帰っててくれないか?ちよつと用事を済ます。」

ああ、行っちゃったよ。

「今日も家に泊まってね〜!」

てか焔速っ!?

絶対聞こえてないよ。

メールでも送っておこう。

それにしてもどうしたんだろう。

焔のあんな姿・・・初めて見た。

カバンや、大切にしている刀までも忘れて行くほど焦ってたみたいだし。

ホント、女の子に荷物持たせるって、最低。

でも、たまには・・・いいかな。

オレは屋上への扉を開けた。

入った瞬間、外の冷たい風がオレを襲った。

そんな中、冷たい空気をさらに冷たくしているような少女が佇んでいた。

「・・・今日調べた。お前、うちのクラスの委員長してるんだってな」

オレは彼女の横に行き、そう呟いた。

「ええ、中学時代の思い出を忘れられずに。今月の生徒会長選挙にもでるつもり」

間違いない。

彼女は……。

「私は、ひとりの少年に恋していた。今でも彼を忘れられない」
彼女は話を続ける。

「彼は臆病な子だった。でも、臆病なりに私を助けてくれた。そんな彼が、私は好きだった」

「何故オレにそんな話を？」

半ば分かっていた。

その理由。

「あなたが、私の最愛の男性に……とてもよく似ているから」

そう……か。

「ひとつ聞く。そいつ……苗字は赤坂……だったりするか？」

「か、彼を知っているの!？」

彼女は驚く。

オレは彼女を知っていた。

そして、オレは恐らくその「彼」も知っている。

「今から言うことをよく聞け」

「・・・死んだよ」

彼の口から告げられた言葉。

たった四文字の・・・たった四文字で私の世界は暗転した。

彼はあの人を知っていた。

そして、彼は既に死んだ。

そう・・・解釈せざるを得ない言葉の内容。

「どう・・・して・・・。」

「詳しくは話せない。だが、死んだのは間違いない」

何で・・・彼はあの子の双子の兄？

そんなはずはない。

彼には兄弟はいなかった。

もう・・・何も考えられない。

「優しかったあいつは、死んだ」

「・・・もう言わないで・・・。」

崩れ落ちる私を、彼は冷たい目で見続けた。

自分が哀れに思える。

もう会えない。

そうは思ってた。

確かに思ってたけど・・・「死んだ」と言う言葉は・・・聞きたくはなかった。

どうして、どうして彼は・・・。

「・・・ごめん。」

眞実を告げた彼はこの場から立ち去った。
もう、何を考えているのか分からない。

「死のうかな・・・もう、心の支えが・・・ない」
自分でも何を言ってるか分からない。

何したいのか分からない。
全て終わりたい。

死にたい。

幸い、ここは屋上。

死ぬのは簡単。

手すりを越えれば、すぐに逝ける。

愛する人はもう、この世にはいない。

今にも崩れそうな足で私は立ちあがった。

弱弱しくなった足を動かし、銀色の手すりに捕まる。

そして、私の行く先を見た。

その先には降り積もった白いマットが薄く敷かれている。

でも、この高さならあのマットも意味をなさない。

確実に、彼のもとに逝ける。

私は手すりをまたいだ。

下に人はいない。

私以外に死ぬ人もいない。

勇気も何も無い。

もはや、私には死にたいという願望しかなかった。

もう一度自分が逝く先を見る。

今はやはり、今は白いマットしか敷かれていない。

「この先、どんな世界だろうと私は構わない。もう一度彼に逢える
なら・・・私は何でもする。何でもするからあ・・・。」

不意にこぼれた雫が頬を伝う。

それを、風がさらう。

手すりも何もない、先は本当に「死」の一字しかない場所で私はもう一度崩れた。

泣きたい。

今は泣きたい。

死ぬ前に、精一杯泣いておきたい。

でも、それは生への執着でしかないような気がした。

「さようなら、みんな」

そう呟いて私は倒れた。

下には降り積もった白い結晶しかないその先へ。

3 - 過去と疑問

目が覚めると、見慣れた天井が見えた。

そう、魂が黄泉あっちの世界に行く前に見せてくれているのね。
何時になったら来るんだろう。

迎えが。

死神が来るか、天使が来るか、悪魔が来るか。

私はもう一度、ベットに入った。

「ちよつと、何時まで寝てるのよ!」

「・・・何で?」

母が私に話しかけてきた。

「あなたっいたら玄関で倒れていたのをお父さんが見つけてくれたのよ?」

「私・・・死んだんじゃない?」

「何バカなこと言ってるの?そんなんじゃない生徒会長になんかなれないわよ?」

生きている?

何故?

どうして。

「私、屋上から飛び降りて・・・。」

「変な夢でも見たんじゃないの?そんなことはどつでもいいから早く朝ごはん食べなさい。学校に遅れるわよ」

あれ、確か昨日って金曜日だったような・・・。

「お母さん、今日土曜日だよ?」

お母さんは時々こんなことがある。

それも、それでいいような・・・悪いような・・・。

「それとあんだ、さつきからメール来てるわよ、4回くらい」
「え？」

枕元にあつたケータイを開いてメールを確認する。

「・・・片瀬焔。何時の間にか登録されてる・・・。」

一通目は「死ぬな」と言う内容。

二通目は「自分の生きる意味を思い出せ」と言う内容。

三通目は「助けてやったから飯奢れよ」と言う内容。

そして・・・四通目は、

「結構好きだったよ、会長」

と言う内容。

「・・・駆・・・。」

今は亡き彼の名を呟く。

「何、彼氏？」

「お、お母さんまだいたの!？」

最高に焦っている私をお母さんはこちらから続けた。

「何でそんなメール送るの？」

「昔、ある一人の少年がいました。彼は非力で、臆病で、ヘタレでも、そんな彼にもひとりだけ、愛する人がいました。彼は彼女のためなら何でもしました。そんなある日、彼の父は彼に命じました。その地から離れると。彼は彼女との別れを凄く悲しみました。しかし、彼は涙ひとつ流さずに彼女の元から消えました。その地を離れた時、父の手によって彼は消されました」

焰は昔話を語るような口調で話してくれた。
でも、何か引つかかる。

「焰、それってもしかして……。」

「多分優衣の考えてる通りだ。オレがお前と出会っよりも前のことだよ」

焰……やっぱり……。

あの瞳の色はカラコンじゃなくて……髪の色も染めているわけじゃない……。

「その少年の名は……赤坂駆と言った」

焰はそう言っただ話を終えた。

赤坂……確か焰のお母さんの苗字だったはず……。

「悪い、結構暗い話になっちゃったな。その彼の好きだった人さ、送り先は」

「気になるなあ……。」

これ以上聞いたら焰に怒られそうだし。
止めとこ。

片瀬焰

彼は一体何者なんだろう。

駆の容姿を持ちながら駆ではない。

かといって駆ではないとは言いきれない言動もしている。

「メール・・・送ってみようかな。」

いつの間にか登録されていた名を、電話帳から探す。

「明日、会えますか？」

そんな文を送りつけた。

彼にはまだまだ聞きたいことはある。

数分経って、メールではなく、電話が来た。

「・・・もしもし？」

『オレだ、片瀬だ。明日、どこで会う？』

「・・・もしよければ、駅前で」

『・・・分かった』

「それじゃあ、またね。焰くん」

『ああ、じゃあな。死んだりするなよ？』

そこで電話が切れた。

私の名前、覚えててくれるかな。

そもそも駆が私の名前を覚えていたのか、それすらも分からない。でも、いいんだ。

もう・・・駆はいないし・・・。

駆が死んだのなら。

私は・・・彼の分まで生きなきゃいけない。

焰くんの最後のさりげない一言でそう思った。

別に私が死んで駆が喜ぶわけじゃない。

むしろ悲しむと思う。

でも、自分自身のけじめのために・・・彼のことは全て聞きたかった。

焰が電話を終えた。

ちよっと聞こえた声だと、女みたい。

「焰、女と会うんでしょ？」

私がそう言っと、焰は少しびっくりしたような顔をした。

「そうだけど、どうかしたか？」

「何で？」

「何でって・・・呼ばれたから？」

「何で疑問形なの？」

「何でだろうな」

「そうやって都合の悪いことを流す。

焰の悪い癖だ。

たったの1年しか一緒にいないけど、それでも癖くらいはわかる。

「私じゃダメなの？」

「いや、そう言うわけじゃないけど・・・。」

たまには甘えてみようかな・・・。

「焰と一緒にいないと、私・・・とっても切ないんだよ？」

「ほら、今日も一緒に寝てあげるから。明日くらい我慢しろ」

む。

そんなんじゃ動かないからね！

「やだ、明日行っちゃダメ！」

「・・・仕方無い。帰る」

え？

「ちよつと待つてよ！ごめん、我儘言っただの謝るから！」

「・・・行っちゃったよ・・・。」

「・・・我儘言わなきゃよかった・・・。」

4 - 真実と恋心

「待ったか？」

後ろから聞こえた彼の声に、私は少し驚いた。

でも、すぐに調子を取り戻して、

「女の子を待たせるなんて、いい度胸してるじゃない」と言った。

「ははは、それでこそお前だと思っよ」

やっぱり、何か知ってる。

私と会ってまだ1週間程度しか経ってないのに。

彼は駆なのかな、やっぱり。

「何で私らしいと思ったの？」

「・・・何となくだよ」

笑いながら適当に流す。

こんなことは駆はしなかった。

「ん？何で腕につかまるんだよ」

「今日くらい良いでしょ、デートなんだし」

「え、今日デートだったの？」

「駆が私にしてくれなかった分、あなたにしてもらうからね！」

彼はあきれたような顔をしながらも、それを許してくれた。

「で、何するんだ？」

「シヨツピングよ」

「だいたいオレがいる理由分かった。荷物持ちだろ」

「ふふ、正解」

焰くんは溜息をついたけど、私についてきてくれた。

荷物持ちをしると言ったわりにはあまり買い物しないんだな。
買ったものと言えば、お菓子、アクセサリー、化粧品・・・どれも
小さいものばかり。
服とか大量に買い込むのかと思った。

「終了！お疲れ様でした！」

「荷物・・・随分少ないじゃないか。」

「だって、他に買うものないし」

こいつらしいと言えばこいつらしいけど。

「元気出たみたいだな」

「おかげさまでね。ねえ、あそこに連れて行って」

彼女が指さした先には、この街で一番高い丘。

綺麗に整備されて、この街全体を見渡すことができる。

・・・だが。

「あそこは・・・遠いぞ？」

ここからだ歩いて30分はかかる。

「いいの・・・あそこに行きたい」

「・・・分かった」

二人並んで丘に向かう。

その際、二人とも一言も言葉を交わさなかった。
長い沈黙。

その末に、たどり着いた丘。
夜になると夜景がかなり明かりで綺麗になる。

「焰くん、ここ・・・夜になるとどんな景色になるか・・・分かる？」

「ああ・・・だいたい予想は付く」
オレは嘘をついた。

本当は何度も来たことがある。
でも、この景色だけは何度見ても飽きなかった。

「私の好きだった人とよく来たんだ、ここ・・・片瀬焰。彼について、知っていることを全て話して」
そうくるか。

もういい。
この際だ。

秘密を明かす・・・か。

「赤坂駆。彼は死んだ。正確には、親によって殺された」
「・・・!?何で!?!」

確かに普通ならあり得ないことだしな。
これくらいじゃ引き返さないか。

「それ以上は機密事項だ。そしてオレ。オレの苗字で気付かないか？」

「・・・片瀬ってどこにでもいる名前じゃない。まあ、この辺りじや見ないけど」

やっぱり一般人には分からないか。

「何でもない、気にするな。」

オレはそう言って丘を降りようとした。

「じゃあ、何で今日・・・私らしいとか言ったの？学校でも話さないし、出会ってから1週間程度しか経ってないのに」
「・・・いいことを教えてやるよ。オレには、赤坂駆の記憶がある。それ以上言うことはできない」

オレに赤坂駆の記憶がある理由。

・・・オレはあいつでありあいつではない存在である。

赤坂駆。

彼はオレの偽名だった。

だが、今では別人。

まるで・・・ではなく、全くの別人。

とある事情から、彼の人格が死んだ。

そして何故かオレの人格が生まれた。

彼の全てを引き継いで、オレは生まれた。

それが全て。

「愛してる。それがあいつの本心だ・・・瑞穂^{みずほ}」

「・・・私の名前・・・覚えてくれたんだ・・・。」

「あいつが・・・この世で最も愛していた女性。オレの中にはそう残っている」

そう言った瞬間、瑞穂は抱きついてきた。

「お、おい・・・。」

「あなた、駆なんですよ！？なら・・・このまま・・・もう少しこのまま・・・。」

「オレ自身は駆じゃない。それに、赤坂駆は偽名なんだ。片瀬の名を隠すために。」

フルネームを偽名にしたからな、苗字だけじゃなく。

「焰あ・・・焰でもいいから・・・。」

おいおい、また泣いて・・・。

・・・早く解散時刻にならないかな・・・買い物が異様に短かったからまだ3時半なんだよね・・・。
だいたい帰るっていつたら9時とか10時だし・・・。

焰から全てを聞いた。

私は今日、駆の全てを知った。

彼はやっぱり駆だった。

「もう一度言う、オレは駆じゃない」

「いいのよ！もう！私、焰も好きだから！優しさだけは駆じゃない・・・。確かに駆との思い出は忘れられないわ。でも、焰も彼に負けないくらい良い人よ」

「性格まるつきり違うんだけどな・・・。」

「大丈夫。今日過ごしてよく分かった。本当に、あなたは駆よ」

焰は、本人は別人って言うてるけど・・・核心は駆と変わらないじゃない。

「この際だから言うておくわ。焰、あなた・・・私と付き合いなさ

い！愛してるんでしょ？」

「……駆に言ってくれ。オレはあいつとは別人だからな」
「何よそれ」

「……でも、今日くらいはお前の彼氏になってやってやるよ。無責任な駆の……償いとして」
「そう、なら……」

「なら、好きな人同士であることをしましょ？」
「……」

あら、黙っちゃった。

丁度いいわ。

私を受けつてのはプライドが許さないしね！

「目を瞑りなさい！」

「仕方無い……」

本当に目を瞑ったみたいね。

……背が高い。

私よりちよつと大きいくらいだったのになあ……男の子ってたつた2年でこんなに身長伸びるのかなあ。

私よりも30cm近く大きい。

私の身長は148cm。

焰はたぶん180以上はある。

背伸びしてもギリギリ口が届かない。

「届かないんだろ。」

目を瞑った焰がそう言う。

「う、うるさい！あなたは黙ってればいいのよ！」

「はいはい」

でも……どうしよう。

本当に届かない。

キスしたいのに……

「ほら、顔あげて」

「……仕方無いわね」

私は顔をあげて目を瞑る。

すると、キスされた。

結構普通にされた。

「デープはしないからな」

「何よ、今日は彼氏なんでしょ？私が駆にできなかったことをあなたにするんだからね！・・・その・・・もつとすごい・・・恥ずかしいことも・・・していいからね・・・。」

は、恥ずかしい・・・。

こんなこと・・・。

よく言えたな・・・私。

5 - 家系と偽り

聞いているこっちが恥ずかしくなるような台詞を全て聞いたオレは瑞穂にこう言った。

「それでも・・・オレはあいつじゃないから。」

絶対歯止めが利かなくなる。

あんなこと言われてもう理性が飛びそうなのに・・・。

普通あんなこと言われたら男なら有無を言わさずにやっちまうよ・・・。

「何で？どうして？・・・私に胸ないから？」

「あ、気にしてたんだ。」

「バカ、だったら何とかしなさいよ!」

いてえ、叩くなよ・・・。

てか何すりゃあいいんだよ、胸でかくするのって・・・。

優衣は結構良い身体してるから全然気になんてしてなかったけど・・・。

てかマジ優衣の胸って気持ちいいんだよな・・・。

柔らかいし、その割にハリがあるし、感度良いし・・・。

「よかったですね！優衣さんのおっぱい大きくて!」

こ、心読まれた!?

「いや、特別大きいわけでは・・・普通より少し大きいくらいで・・・

・ああ、ウエストも細かったな・・・それから・・・。」

「もう聞きたくないから!」

「わー、蹴るな!」

・・・こりゃ大変なことになりそうだな。

そんなとき、電話がかかってきた。

「はい、焰。」

『焰、社長から依頼が来たよ。』

「ああ、優衣か。どこで待ち合わせる？」

『ん〜、じゃあ学校で。』

「了解。」

「へえ・・・私とデートしてるのに優衣さんとデートするんだあ。」

「違う、シゴトだよ。お前は絶対に来るな。」

「別に行きたいわけじゃないけど・・・。」

「じゃ、また明日!」

オレは走った。

もうこの空気はごめんだ!

「優衣、待たせた!」

「焰の足でも5分かかるんだね。どこで何してたの？」

「あの丘にいた。以上だ。」

「へえ、何してたかは教えてくれないんだね。」

勘違いされてるよ・・・。

「さ、行こう。」

「・・・今日のターゲットは？」

「ん?そんなの嘘に決まってるじゃん。」

え?

「たまには焰と食事でも・・・と思ってね。」

何故？

いきなり……。

つてか瑞穂にばれたらなんて言い訳しよう……。

「いつも私の手料理でしょ？だから高級レストランでも……焰の奢りで。」

「ちよ、何言つてんすか!？」

「ふざけんな。そんな金持ってきてないし!？」

「だいじょーぶ、私が貸したげるから」

「つてなんだよ、つて……。」

「自分で払えよ。」

「えー、女の子に払わせる気？最低!。」

「え、そつちが勝手にしたことでしょう?」

「だったらこんなことするなよ。」

「いつものお礼だよ!」

「いや、意味わかんねえし。」

「オレの奢りがいつものお礼とかマジ謎。」

「でも焰ってお金いっぱい持つてるでしょ?」

「それは君も同じだよな?」

「あ、ばれた?」

「同じことやつてんだからばれるに決まってるだろ!？」

「今日一日私を放置した責任取つてよね。」

「何故オレが……。もういいや、こいつには勝てない気がしてきた。」

「オレの親父も叔母さん……。親父の姉には頭が上がらないようだし。ここんとこ親父に似たかな……。」

「もう予約してるから。さ、行こ!」

「予約済みですか……。最初から行く気満々だったんだな、優衣は。」

「・・・服忘れた。」

「持ってきてるよ?」

「サンキュー。」

全て昨日焰が帰ってから計画していたことだから、狂いはない。
更に場所も隣の県、山中県山中市だから絶対に私の知り合いもいな
い。

ちなみにここは神坂県神坂市。

山中市は最近じゃ北半分が「学園都市」になっちゃったからね。
凄いよなあ。

「ここかよ!?!」

「ここだよ。」

通称・セレブの店。

山中市の南半分が「セレブシティ」と呼ばれているくらいだし。

「親父来てるかもな・・・。」

「来てないっしょ。」

二人で店に踏み入れる。

孤児院にいた頃はこんな生活夢にも見てなかった。

こんな生活ができるのは、全部焔のおかげ。

焔が私に話しかけてくれたから。

我儘言っつて行かせてもらったのも、焔がお父様に話をつけてくれたから。

焔には感謝してるんだよ……。

「……予約してた片瀬です！」

「オレの名前で予約してたのかよ!？」

だって……片瀬の方がここじゃ名が知れてるし。

私の苗字なんて、言っただけで孤児だって分かっちゃっよ……。

「……知り合いはいないみたいだな。」

「……ん、あれは……ねえ焔、あそこ。今入ってきた人ってもしかして……。」

優衣が指した先。

「……げ、翠香姉……。」

「え、知り合いなの？」

椎名グループ次期当主・椎名翠香。

彼女との関係。

それを話すにはまずオレの立ち位置から話さなければならぬ。

オレの親父は何故か子供が多い。

正妻の子だけで4人、他にも何人もいる。

オレは正妻ではない女から生まれた。

彼女はオレを産んだら、もう子供を産めないと知ったのかやたら大切にしてくれた・・・オレと言うより前の人格、瑞穂の言葉を借りれば駆、とでも言おうか。

ま、良妻賢母だったな、母さんは。

まあ、だったというのは最近会ってないからで（神坂市に帰ってきからは毎日優衣の部屋に泊まってるから。ちなみに家に帰った昨日は母がいなかった）、決して死んではない。

んでまあ結局のところ、翠香姉とは腹違いの兄弟ってところか。

翠香姉は正妻から生まれたからな。

「・・・優衣、できるだけ気付かれないようにしような？」

「うん、分かった。」

こんなときだけ物分かり良い子で助かる。

翠香姉はもうセレブの代表格と言っていいほどの人間だから、オレとは次元が違う。

てか、話についていけない。

「あら、焰？」

そう思ってた矢先にばれちゃった・・・。

オレ達はギリギリ食べ終わっていたので、普通に逃げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602f/>

地を駆ける焔のように

2010年10月9日23時14分発行